

音楽情報

縮小版

ルツェルン・フェスティヴァル

8月14日から1カ月間予定されていたルツェルン・フェスティヴァルはいったん中止されたが、10日間の短縮プログラム『LIFE IS LIVE』として実行された。そのオープニングを飾ったのはヘルベルト・ブロムシュテット指揮のルツェルン祝祭管弦楽団と、マルタ・アルゲリッチのベートーヴェンの夕べだ(所見日8月15日)。KKL(ルツェルン・カルチャー・センター)は入り口を湖側のみに絞り、希望者にはプログラムの色に合わせた黄緑、緑、カーキ色の布マスクを配る。消毒液のディスペンサーを通過して入場した。



アルゲリッチとブロムシュテット指揮ルツェルン祝祭管。今年は10日間の短縮プログラムで行われた ©Peter Fischli / LUCERNE FESTIVAL

オーケストラも社会的距離を保った配置だが、1曲目の『ピアノ協奏曲第一番』では気にならなかった。現役最長老指揮者のヘルベルト・ブロムシュテットに合わせて、いつもよりきびきびと登場したマルタ・アルゲリッチは、オーケストラに合わせて頭を振ったり、眉を上げて団員とアイコンタクトを取ったり、上を向いたり、目を瞑ったりして集中するが、どこか落ち着かない。しかしいったん弾き始めると、その明るく楽天的な音色がコロナ禍の聴衆の心を慰めた。

オーケストラはブロムシュテットにピタッと寄り添い、どんどん弱音に向かって美しく抑制されていく。そのうちに夏の空に雲が流れて、陽光を遮るときのように音色が陰りを帯びていく。その変化はそのまま、若いベートーヴェンがこれから辿る人生を暗示しているような奥深い表現だった。そのうちにその陰りはかき消され、元の明るいモテーフに戻るのだ。

コンサートマスターのグレゴリー・アース(カメラータ・ザルツブルクのコンサートマスター)と微笑を交わしたあと、第2楽章をしつとりと歌い出したアルゲリッチは、彼女のために作曲されたような感傷を込める。最小限のジェスチャーでオーケストラを操るブロムシュテットと巨匠同士の息がピッタリ合い、どちらかという悲観的な美しさを極めた。アタッカ

で始まった第3楽章は活気ある曲想にあふれ、管楽器ソロや一体となった各パートが、モーツァルトのオペラの重唱のように雄弁に歌って煌めいた。最後の音を弾き終えたアルゲリッチはすぐに立ち上がった。カーテンコールで何度か出たり入ったりしたあと、アンコールにシューベルトを弾き始めるが、そこに立つ

て聴いているブロムシュテットの包容力が印象的だった。しかしアルゲリッチは、どこか「心ここにあらず」な様相で曲を終止させ、また何度か舞台袖と往復したあと、コンサートマスターに許可を得た様子で退場し、2曲目のアンコールが期待された瞬間、惜しくも拍手が収まってしまい、拍子抜けしたような立ち姿がドアの奥に認められたのは残念だった。

続く「交響曲第3番『英雄』」は、すべてを超越したような癒しの音楽をブロムシュテットが紡ぐ。コントラバスが大活躍して、社会的距離を確保するために散らばった楽団員たちの響きをまとめようとするが、第2楽章ではやはり無理があった。それでも十分鮮やかに心を揺さぶる夕べだった。

8月18日はルツェルンから世界に羽ばたいたテノール、マウロ・ペーターと当フェスティバル・デビューとなるヘルムート・ドイチュのリーダー・アーベントを聴いた。ドイチュは歌曲伴奏の第一人者としてだけでなく、若手発掘・指導にも定評があるが、ペーターもミュンヘン音楽大学での教え子だ。2012年シューマン・コンクールで優勝し、聴衆賞も得たペーターは、今宵もオール・シューマンで挑む。独特の満面の笑みを浮かべて登場すると、客席が和んだ。柔らかな温かい声を吟味して使いこなし、歌詞も明瞭で、とくに明るい響きの「ア」の母音が心地よい。前半のアイヒェンドルフ歌曲集の出色は『月の夜』で、極限までの弱音をたためたように歌った。ほか

スイス NOW

新型コロナウイルス
関連情報

スイス国内でヴァカンス

夏休みの旅行シーズンに向けてEUへの国境を開いたスイス連邦だが、それに伴い、特定の国からの入国者に対する検疫と10日間の自己隔離を義務づけている。しかし自己申告制の緩い対応に批判が集まり、8月8日から「入国から2日以内に所管の州当局へ報告」することを義務づけた。それと同時に、対象国には現在までルクセンブルクのみが西欧から指定されていたが、そこにスペインやベルギー、モナコが追加され、警戒感が強まった。結果として、スペイン旅行をキャンセルするヴァカンス客が増出した。収獲期の出稼ぎや、移民の里帰りが多い東欧ではセルビアが除外され、残るボスニア・ヘルツェゴビナ、ルーマニア、コソボにアルバニアが追加された。インドやグアム、マルタなどのスイス人に人気のヴァカンス先も指定され、現在53カ国となっている。これまでの動きを受けて、今年の夏はスイス国内でヴァカンスを過ごす人が増えている。高級避暑地から発生したヴェルビエやグシュタードなどの音楽祭は、彼らに音楽を提供するために、最低限のコンサートを開催した。加えて前者は、早くから提携していたラジオ局やインターネット配信でのアーカイブをまとめて「ヴァーチャル・ヴェルビエ・フェスティバル」を実現させた。

連邦制のスイスは夏休みも各州で時間差を作り、交通渋滞などを回避しているが、新学期からは高等教育機関でのマスク着用も始まることになった。そのほかの日常生活でも、州主導で店舗内でのマスク着用義務などが進められており、ジュネーヴ、ジュラ、ヴォー、ヌーシュテル、バーゼル州に続き、チューリヒ州そしてフリーブル州も義務づけられたが、その詳細は各州で異なるため、国内の移動時には最新情報の取得が必須となる。チューリヒ州ではイタリアに隣接しているティチーノ州に続き、感染経路特定のため、飲食店客の連絡先リストを作成することが決まった。現在はヴァカンスからウイルスを持ち帰ったと思われる感染者も多く、1日380人を超える日もある。そのため政府は感染予防対策措置を強化し、8月末に解禁予定だったサッカーやアイスホッケーの試合観戦を含む1000人を超える大規模イベントが、9月末まで引き続き禁止されることになった。PCR検査の陽性率は、十分な検査数が整った6月末の7パーセントから現在は5パーセントに減少している。累計感染者数は人口860万人に対し4万540人、累計死者数は1722人となっている。



ルツェルン・フェスティバルで語るアラン・ベルセ大統領 ©Peter Fischli / LUCERNE FESTIVAL

には意外にもドラマティックな2曲、《城の上にて》と《たそがれ》が際立っていたが、未熟な部分が残る曲もあった。

しかし後半の《詩人の恋》では、彼自身の苦い恋を告白されているような錯覚を覚え、批評することも忘れた。ナイーヴな恋心が膨らんでいき、そして顔の輝きが徐々に曇っていく過程は同情を誘う。そして《僕は恨まない》で心の叫びが炸裂すると、抱きしめて慰めてあげたくなくなるほどだ。その怒りが収まり、《恋人の歌を聞くと》を無表情に、落ち着いて歌い始めると劇性が増す。《夢で私は泣いた》では、ピアノと歌が異次元のまま出会うことなく、人類の孤独を表現する。《古いおとぎ話》では声を上から下まで自由自在に操り、終曲で完全燃焼して歌い納めたが、その後には昇天するようなピアノ後奏が天国に向かわず、地上に残ったままだったのはなぜだろう。やはり歌



ルツェルン・フェスティバル出身のペーターとこの音楽祭デビューのドイツによるリーダー・アーベントから

曲は師弟関係ではなく、対等に刺激し合う掛け合いが聴きたい。

アンコールは《蓮の花》、《悲劇》、《君は花のよう》、《君の顔》と求められるままに4曲も続き、まったく疲れも見せずに終演となった。今後のさらなる成長が楽しみだ。

トーンハレの パトロン・コンサート

新シーズン開幕前のチューリヒ・トーンハレでは8月19日から3夜連続で、パトロンのためのコンサートが開かれた。前シーズンに予定されていたヴァイオリニストのり

サ・パティアシユヴィリをソリストに迎えたプログラムを、休憩なしで演奏できるよう再構成したものだ。あいかわらず自然体な音楽監督のパーヴォ・ヤルヴィだが、モーツァルト「交響曲第29番」は可憐に仕上げ、無垢な弱音が心を洗った。第4楽章は超速だが正確なアンサンブルで、跳躍感も実現させ、強弱に富んで美しい。その清楚さをスラヴの深いヴァイオリンが小気味よく壊し、バルトック「ヴァイオリン協奏曲第1番」が始まるとヤルヴィは、以前よりも確信に満ちたパティアシユヴィリを自由に歌わせ、官能的ですらあった。最後はイベール《ティヴェルティスマン》で、聴衆を楽しませてくれた。ヤルヴィがホイッスルを吹き、打楽器奏者がイエローカードやレッドカードを出すなどふざけながらも、ハイレヴェルな音楽性と即興のような自由さを両立させていた。